

「わが道が明らかにされる世界」

皆さんと一緒に、90年の生涯を貫いて「ここに道あり」と教えて下さった親鸞聖人の歩かれた道を聞思したいと思います。

先月5月の中頃に、あるお寺さんでお話をさせてもらう機会がありました。お話をするという形で自分自身が問われている、そういう場所をいただいていることを忘れずにいるつもりでした。

しかし、いつの間にかそういうことを忘れ、あくまで自分が「教えるのだ」という高いところに立っていたのです。

お話をさせてもらっている中で、「勝手つんぼ」という言葉を遣っていました。「自分に都合のいいことは聞き、少しでも都合が悪いことはあえて聞く耳を持たない。そういう聞き方が、本当の聞法の姿勢でしょうか？」ということで、「勝手つんぼ」を遣ってしまいました。

お話が終わって帰るときに、あの言葉は「差別用語」ですねと言われてみてはじめて気がつきました。

耳が不自由なお方に、申し訳ないことを言ってしまったということに恥ずかしい思いをしました。

今まで自分にとって「差別は関係ない」「差別した覚えはない」「差別するとはとんでもない」と力んでいました。しかし、そう力んでいる私に差別のころやまぬものがあつたのです。我が身のことが少しも分かっていなかったということを思い知らされました。

浄土真宗に帰すれども
真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて
清浄の心もさらになし

この親鸞聖人の悲歎は、自分が限りなく見い出されていくという喜びの表現でもあるのですが、実は、悲しみの形をとった智慧の輝きでもあると思います。この和讃を深く味わせてもらおうと、ここでうたわれている悲歎は、私自身に向けられているのであるということに気づかせてもらったことでした。ありがとうございました。